

BanG Dreamasters!

toku3

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

火文明、水文明、自然文明、光文明、闇文明。

死闘を繰り広げる5つの文明を駆使してクリーチャーを召喚し敵のシールドを破壊、とどめを刺すカードゲーム、『デュエル・マスターズ』。

この物語はそんなデュエマを愛する少年がガールズバンドと出会い関わっていく物語である。

目次

プロローグ	1
v s 赤緑モルトNEXT (前編)	5
v s 赤緑モルトNEXT (後編)	14
勝利、そして	24
P a s t e l * P a l e t t e s	31
革命時間停止 v s 革命疾風速攻 (前編)	38
革命時間停止 v s 革命疾風速攻 (後編)	44
そのデツキは…	54
特訓	61

私が質問をすると男が狂ったように笑い始める。何が何だかわからない私はその光景をただただ怯えた目で見ていくしかなかった。

「ファン？この外道そとみちもりひと 盛人をあんな連中と一緒にしないでほしいねえ！！！！」

外道と名乗った男は更に力説する。

「僕は選ばれたのさ！運命にね！これからは毎日彩さんと一緒さ！！」

「えっ…？」

外道さんの発言に私は言葉を失う。毎日…一緒？

「おや、知らなかったのかい？…：…：…：そうかそうか社長もなかなか粋なことをしてくれるじゃあないか！フヒヒ！」

「どういう…：…：…：ことですか？」

「僕は今日からPastel*Palettesの専属デュエマインストラクターになったのさあ！！！！フヒヒヒヒヒヒ！」

デュエマ、というよくわからない単語も気になったがそれよりも目の前の外道さんがこちらに迫ってくる。

「そうだなあ…：まずは彩さんにレクチャーしてあげなきゃなあ…：」

（こ、この人…：目が怖い！正気じゃない！）

私は恐怖から言葉が出ずに後ずさる。

「彩さんのシールドをブレイクしてダイレクトアタック…：フヒヒヒヒヒヒ」

（やめて…：怖い怖い怖い怖い！！！！）

今にも襲われる———そう思った瞬間、

「おい」

「!?だ、誰だ!？」

私でも外道さんでもない声に私たちは声がした方を見る。

そこには私と同じくらいの年であろう男の子が立っていた。

「いい年したおっさんが白昼堂々とアイドルを襲うとはねえ…しかも『彩さんのシールドをブレイクしてダイレクトアタック』とか流石に気持ち悪すぎて引くわー」

「なっ…ななななんだお前はあ!!!け、けっ警察に通報するぞ!!!」

「通報してみたなら?この状況から!してどうみてもおっさんに勝ち目があるとは思えないけどねえ」

「ぐぬぬぬ……………」

どうやら男の子は外道さんが私に襲い掛かろうとした光景を見ていたらしい。外道さんは焦りと混乱でパニック状態になっているようだ。

(い、今のうちに…!)

私はその隙に外道さんの元から離れようとしたが、

「フヒ、フヒヒヒヒヒヒヒヒツツツ!!!」

「きやあっ!？」

外道さんに腕を掴まれ逃げることは叶わなかった。

「…おいおい」

「ちよ、調子に…きやがつて……………デユエマで勝負だ小僧!ぼ、僕が勝ったらご、ここで見たことは忘れて帰ることだなあ!!!」

外道さんは私の腕を掴みながら男の子にドラゴンのようなマークが書かれている紙を見せ、取引を持ち掛ける。あれがデユエマ…なのかな?

(つて、そんな取引に応じるなんてあるわけ)

V S 赤緑モルトNEXT (前編)

(外道盛人はデュエマをやっている話は事前に聞いてはいたが……まさか相手の方から持ち掛けてくるとはな)

『デツキ』と呼ばれる40枚のデュエル・マスターズカードの束を丁寧にシャッフルしながら俺——高宮^{たかみや} 翔^{しょう}はここに至るまでの出来事を思い返していた。

今日、とある人から呼び出しを受けていた俺は盛大に寝坊をした。考えられる原因は夜遅くまでデュエマの大会の動画を見ていたからであろう。

そんなわけで、必死に集合場所へ急いでいた俺は途中で俺の行く先と逆方向に走るところかで見たことあるような女の子とそれを追いかけるおっさんを発見。その光景を呼び出し人に伝えたところ、急遽その子を追いかけるようにとの指示に(その時に外道のことを教えてもらった)

何とか見失わずに追いついた俺の目に映った光景は——というわけだ。

(暴力沙汰になったらどうしようかと思ったが……デュエマなら問題ない)

外道が暴れたりして彼女や俺が怪我をしたら……俺はともかく彼女が怪我をすることだけは避けなければならない。

(さて、そろそろ勝負に集中しよう)

無事にデュエマでの勝負に持ち込めたということで思考を相手の『超次元ゾーン』に集中する。

『ゾーン』とはカードを置く場所のことで、その中でも超次元ゾーンはゲーム中に出すことの出来る特殊な『クリーチャー』カードなどを置いておく場所だ。初期状態で最大8枚まで(同じ名前のカードは4枚まで)置くことができる。このゾーンから現れるクリーチャーは非常

に強力でゲームの展開を大きく揺るがすことが多い。

この超次元ゾーンは『公開情報』であり、ゲーム前にお互いに確認する事ができる。既に駆け引きは始まっているというわけだ。

(相手の超次元ゾーンは……うげえ)

相手の超次元ゾーンを見て思わず嫌な顔が出てしまう。《爆熱剣

バトライ刃バ》に《闘将銀河城とうしょうぎんがじょう ハートバーン

》…どちらも非常に強力な効果を持つカードだ。特にバトライ刃に関しては一部のカードとの組み合わせが猛威を振るい、使用する際には制限をかけられている程のカードである。

「フヒヒイ……僕のカードを見てビビっているのかい？怖いなら降参しても…フヒッ」

「誰がするかよ」

「ツチ……超次元も用意できないガキが」

外道の言う通り、俺は超次元ゾーンにカードを置いていない。超次元を使わないから不利——というわけでもない。置かないことによつて相手にどんなデッキなのかを隠すことが出来るからだ。

超次元ゾーンのカードを確認した後、お互いにデッキの上から5枚のカードを裏向きに見ずに『シールドゾーン』に置く。これが自分の身を守る『シールド』だ。これが全て無くなった後にもう一度攻撃を受けると敗北してしまう。その後、デッキの上から更に5枚引き自分の手に持つ。これが『手札』でここからカードを使ってゲームを進めていく。

「最終確認だ。おっさんが勝つたら俺はこの場であったことは何も言わずに立ち去ることを約束する。俺が勝つたらその子を返してもら

う」
「いいだろう……待っててね、彩たん！このクソガキを僕がポッコボコにしてあげるからね！」

「デュエマ・スタート!!!」

(始まった……よくわからないけど頑張つて!)

名前の知らない男の子と外道さんのデュエマが始まった。何かなんだかよくわからないけど……あの子が勝つてくれることを祈るしかない。

「先行は譲つてあげるよ……フヒヒ」

「ああそうかい、そんじやお言葉に甘えて先行はいただくぞ」

男の子の番から先に始まるみたいだ。

「先行の1ターン目は山札からカードを引くことは出来ない、そのまま手札から《ダイヤモンド・ソード》を『manaチャージ』」

手慣れているのか、カードを1枚置いた後にすぐにそのカードを横に捻る。

「そしてmanaで《預言者クルト》を『バトルゾーン』に出す!」

男の子の手に持ったカードから更にもう1枚のカードが置かれると丸いヒヨコのような生き物が現れた!

「か、かわいい……」

『召喚酔い』の為、クルトは『攻撃』できない。これで俺の番は終了だ」

「フヒヒヒヒヒヒヒヒ!!! クルトとかwwwwww」

外道さんが男の子の場にいるクルトを見て笑い出す。どういこうとなの……？

「彩さんに教えてあげるよお！あいつが出したのは『パワー』がたった500で能力もないただの雑魚『クリーチャー』さあ！」

「そ、そんなあ……………」

「そんな雑魚を使っているようじゃ僕のドラゴン達には到底敵わないさあ！フヒヒイ」

「……………」

男の子は喋らない。秘策があるのか、それとも本当に……………？

「僕のターンだ！ドロー！《ボルバルザーク・エクス》をmanaチャージ！これでターン終了！」

外道さんは1枚カードを置いてターンを終える。男の子のようにクリーチャーは出さなかったものの、これで問題ないとどこか余裕そうな顔だ。

「俺のターン、manaを『アンタップ』、ドロー。《ミラクル1 ドレミ2 4》をmanaチャージ。そしてクルトで攻撃」

男の子の攻撃の宣言と共にクルトが外道さんを攻撃しようと動き出す。

「する時に《タイム3 シド》に『革命チェンジ』！」

更なる宣言と共に動き出していたクルトの背後から星のような乗り物に乗ったクリーチャー——シドが現れクルトとバトンタッチをするとクルトは男の子の手に戻りシドが代わりに外道さんに向かう！

「クリーチャーが入れ替わった!？」

「クリーチャー同士の手繋ぎの連携……………それが革命チェンジだ！シドでシールドブレイク！」

シドの攻撃が目の前まで差し掛かった時、シールドが外道さんの目

の前に現れ直撃を防いだ。防いだシールドはそのままカードへと戻り外道さんの手へ。

「フヒッ!?……………チッ」

「これで一步リードつてとこだな。ターン終了」

シールドの枚数は外道さんが1枚減り、4枚。男の子の言う通り一步リードしたと言えるだろう。

「い、1枚割っただけで調子に乗るなよガキ!僕のターン!ドローして《ねつけつりゆう熱血龍 バトクロス・バトル》をマナチャージ!2マナでつ……………!」

外道さんは勢いよくカードを叩きつけ2枚になったカードを横に捻り何かをしようとするが……………

「?!?か、カードが唱えられない!?!」

どうやら手に持っているカードが使えなくて困惑しているようだ。もしかして……………

「あのシドってクリーチャーが何かをしてる……………?」

「ふっ。あの子の方が先に気づくとは、おっさんとは大違いだな」

「こ、小僧!な、ななな何をしたあ!!!」

「《タイム3 シド》の能力だよ。こいつがバトルゾーンにいる限りおっさんの『呪文』を唱えるコストは2多くなるんだ。大方《メンデルスゾーン》でも唱えようとしたんだろうが……………もつと盤面をよく見ることだな」

「ぐぬぬぬ……………クソガキめえ……………!!!ターンエンドだっ!!!」

「す、すずい……………!」

よくわからないけど、外道さんのやりたいことを読み切って邪魔をしたってことなのかな……………?

「アンタツプアンドドロー！《音精おんせい ラフルル》をマナチャージ！2マナで《タイム1 ドレミ》を召喚！出た時の能力で1枚引いてターン終了だ！」

「僕のターンっ!!!《無双竜鬼むそうりゆうき ミツルギブースト》をチャージして終了だ!!!」

「俺のターン、《タイム1 ドレミ》をマナチャージ、3マナで2体目のシドだ」

「んがああああああああああっつつつつ!!!」

更に呪文のコストが増え何もできずに外道さんが怒りを露わにする。完全に男の子がこの場を支配していた。

「クソガキがあああっ!!!バトクロスをマナチャージしてターンエンドだああああ!!!」

「このターンで決めるっ…!ドロっ!」

男の子がこれまででない勢いでカードを引いた。どうやらこのターンで決着を付けるようだ。

「クルトをマナチャージ、2マナで《黙示賢者ソルハバキ》を召喚！出た時の能力で召喚に使用したマナゾーンのダイヤモンド・ソードと手札の《コアクアンのおつかい》を入れ替える！」

神々しい建造物のクリーチャーが現れ男の子の手札のカードが入れ替わる。更に男の子の展開は続くみたいだ。

「『シンパシー』能力で自分の場にいる光の3コスト以下のクリーチャー——シド2体、ソルハバキ、ドレミの4体分コストを軽くして3マナで降臨せよ、《共鳴の精霊龍きょうめいのせいれいりゅう サザン・ルネツサンス》！」

男の子がカードをかかげた瞬間、空から眩しい光があふれ出す。その光が収まると天使の翼を生やした神々しい龍が場に降り立っていた。

「サザンがバトルゾーンに出た時、自分の光の3コスト以下のクリー

チャーの数だけドロウすることが出来る！よって4枚ドロウ！残った1マナでクルトをバトルゾーンに！」

これで男の子の場には6体のクリーチャーが並んだ。外道さんのシールドは残り4枚だから……

「外道さんに攻撃が届く………?？」

「まあだだあ!!!今出した3体は召喚酔い！このターンには攻撃はできない「それはどうかな?」!？」

「ドレミでおっさんのシールドをブレイク！する時に……こいつと革命チェンジだ」

革命チェンジ宣言。それによりドレミが戻り新たな別のカードが送り出される。

「《ミラクル1 ドレミ24》にチェンジ！」

先程戻ったドレミと似たようなクリーチャー——ドレミ24が現れた。

「ドレミ24はバトルゾーンに出た時に手札から『光文明』か『水文明』のコスト3以下の呪文をただで唱えることが出来る！俺が唱えるのはソルハバキの効果で戻した《ダイヤモンド・ソード》！」

ドレミ24は持っているステッキを振ると剣の形をした光が場に降り注ぐ。

「これによりこのターン、俺のクリーチャーは召喚酔いに関係なくおっさんを攻撃することが可能！そのままドレミ24でシールドブレイク！」

「やった！」

「フヒイ!?し、しまっ………」

これで男の子の勝ち——そう思った瞬間、

ドレミ24の攻撃を防いだ外道さんのシールドから稲妻の形に似たアイコンが現れた。

僕がポッコボコにしてあげなきやねえ！ドロー！」

シド達がいなくなつたことで呪文を自由に使えるようになった外道さんの反撃が始まる。

「バトクロスをマナチャージっ！まずは3マナで呪文、《スクランブル・チェンジ》！これで次に出す火のドラゴンのコストを5下げるう！よって2マナでえ………」

「《超戦龍覇 ちようせんりゆうは モルト NEXT》 召・喚！！！！」

膨大な炎が場を渦巻く。その中から炎を引き裂き一つの影が飛び出した。

右腕に赤き龍、左腕に青き龍を宿す男——モルトNEXT

T、爆誕。

V S 赤緑モルトNEXT (後編)

「フヒヒWWWWWWWこいつが出たからにはクソガキWWWお前に勝利はなああああいい!!」

……あのクリーチャー^{モルトNEXT}が出た瞬間、場の流れが変わった。今までずっと男の子の方に向いていた流れが一気に外道さんに流れていくのを感じる。

(嫌な予感がする……)

デュエマを知らない私さえこう思ってしまうほど、モルトNEXTから放たれる威圧感は凄まじかった。

「まずは出た時の『マナ武装』能力発動! 『ドラグハート・フォートレス』である『爆熱^{ぼくねつ}天守

バトライ閣^{かく}』を超次元ゾーンからバトルゾーンへ!」

場に降り立ったモルトが右腕をかざすと、上空に巨大な穴が開かれ、中から青き炎を纏った刃——『爆熱^{ぼくねつ}剣

バトライ刃^ば』が現れた。

モルトがそれを掴み再び上空へ放つと、刃は青き炎を更に強く輝かせ、モルトよりも何倍も大きい城——バトライ閣へとその姿を変形させた。

「……モルトNEXTとバトライ閣の同時使用はルール上禁止されているはず」

「えっ!? それって……!」

「ルールう? 何を言ってるんだあい? 誰がお前とのデュエマを『殿堂レギュレーション』でやるって言ったかなあWWWWW?」

「酷い! そんなの不公平! まあ、いいぜ。俺が確認をしなかったのも悪いからな! ええっ!」

不公平だ、と私が言おうとしたが男の子はなんともないかのように受け入れた。

「フヒヒヒWWW物わかりのいいガキは嫌いじゃないWWWそれと

「ねっけつりゅう熱血龍 バトクロス・バトル」！ドラゴンだからバトルゾーンにイ
!!!」

モルトNEXTがガキのシールドに走り出すと同時にバトライ閣
から赤い鎧を身に纏い四本の腕を持つ龍——バトクロスが射
出された！

「8マナのドラゴンがタダで出てきた!？」

「バトクロスの効果でガキのサザンと強制バトル!」

射出されたバトクロスはそのままサザンの目の前に降り立つと、四
本の腕から強烈なラッシュを繰り出す。負けじとサザンも手に持つ
ハルバードで応戦。

バトクロスの一撃とサザンの一撃がぶつかり合い、爆発。爆発が収
まると場に互いの姿はいなくなっていた。

「これで邪魔はいなくなつたあ!そのままシールドをダブルW・ブレイク
!!」

殴る、蹴る。モルトの激しい攻撃はシールドを2枚同時に破壊し
た。

「シールドチエック………トリガーは、なしだ」

「シールドの枚数が並んじやつた………」

「そしてえ!モルトNEXTの『龍ドラゴン マナ武装』能力発動だあ!モルト
NEXTがこのターンはじめて攻撃する時に火のドラゴンが5体以
上マナゾーンにあれば、攻撃の後、アンタップさせる!再び起き上が
れ、モルトNEXTお!」

僕のマナゾーンにいるドラゴン達の力を受け、再びモルトNEXT
は立ち上がる。

「そのままモルトNEXTでもう一度アタックだあ!当然バトライ閣
の効果ももう一度発動するぜえくくく??」

再び山札の上のカードを勢いよく捲る。………フヒッ

「フヒヒヒヒヒ!!!完璧だ………捲れたのは二枚目のモルトNEXTだ
あああああ!!!」

バトライ閣から二人目のモルトNEXTが射出される。これで下
準備は整ったあ………!

「二枚目のモルトNEXTのmana武装能力で超次元ゾーンから
《闘将銀河城 とうしょうぎんがじょう ハートバーン》をバトルゾーンへ!」

地面から史上最強のドラグハート・フォートレス——ハート
バーンが轟音を立ててその姿を現した。ハートバーンの出現と同時
にバトライ閣がそれに応えるかのように光を放ち始めた!!!

「モルトNEXTの登場によって、バトライ閣の『龍解』条件達成!!!
《爆熱DX ばくねつデラックス バトライ武神》へと姿を変えろ、バトライ閣!」

バトライ閣が城の形から姿を変えていく。光が収まるとバトライ
閣はモルトNEXTの何倍も大きい超巨大な甲冑を着た龍——
『ドラグハート・クリーチャー』最強の一角、バトライ武神へとそ
の姿を龍解させた。

「お、大きい………あれもクリーチャーなの!？」

「これで能力の解決は終了!そのままシルドを攻撃だ、モルトNE
XTお!!!」

モルトNEXTは飛び上がりそのまま両腕を正面に構えるとエネ
ルギー波を解き放った!

エネルギー波はクソガキのシルドにぶつかり二枚のシルドが
割れた時点でその勢いを止めた。

「トリガー………なしだ」

「まだまだ僕のターンは終わらないっ!!!ハートバーンの能力でバトル
ゾーンにある僕のドラゴンは全てスピードアタッカーになる!よっ
てバトライ武神とモルトNEXTも攻撃可能だあ!!!」

「シルドは残り1枚!?!このままじゃ負けちゃう!!!」

「フヒヒヒヒヒ!!!絶対無敵のドラゴンコンボの真髄はここからだあ

……バトライ武神で攻撃イ!!!」

僕の指示と共にバトライ武神が応えるかのように雄叫びを上げる。雄叫びに応えるかのように僕の山札の上から3枚のカードが上空を舞う。

「バトライ武神の攻撃時、山札の上から3枚を見せ、その中の進化ではないドラゴンと進化ではないヒューマノイドを全てタダでバトルゾーンに出す!公開されたのはこの3枚!」

《メガ・manaロック・ドラゴン》

《メガ・manaロック・ドラゴン》

《メガ・manaロック・ドラゴン》

「3枚とも進化でないドラゴン!そのままバトルゾーンへ!」

戦場に火柱が3本噴き上がる。その中から炎を纏った大剣を構える刺々しいドラゴン——メガ・manaロック・ドラゴンが降臨した。

これではバトライ武神、2体のモルトNEXT、3体のmanaロック・ドラゴンの6体のドラゴンが。

「た、たくさんドラゴンが……!シルド一枚じゃこんなの……!」

「manaロック・ドラゴンの効果!クソガキのmanaを封じ込めろ!」

3体のmanaロック・ドラゴンが大剣を振るう。すると巨大な熱波が出来上がり、クソガキへと襲い掛かった!!!

「ぐうう……っ」

「ああっ!!!」

「これで次のターンお前のmanaは全てアンタップしない!まあ、このターンで終わりだけどねえ……最後のシールドをブレイクしろ、バトライ武神!」

バトライ武神が超巨大な刀を構えると——

一閃。

ただ、それだけで地面を抉るほどの巨大な衝撃波が放たれる。衝撃波はシールドにぶつかると轟音を立て爆発した。

「さあ、最後のシールドチエックだあ!!!」

爆発の煙が晴れる。そこにあったのは……………

「『スーパー・S・トリガー』！《奇^き石^{せき} ミタラシオ》！」

団子のような並びをした石ころが現れた瞬間、石ころから閃光が放たれる。その光はあまりにも眩しすぎて目を開けられないほどだ。

光が収まり目を開けると———僕のドラゴン達が全て座り込んでしまっていた。

「ミタラシオのスーパー・S・トリガー能力で全てのクリヤーチャーをタップさせてもらった。これで、このターンで決着がつくことはない!!!」

「……………フヒヒツ、無駄なことを……………ターンエンドだ」

「やったあ！あの攻撃を耐え切った！」

まさかお試しで入れていたミタラシオが最後に出てくるとは……………

コイツを使わずになんとかなったのは嬉しい誤算だ。運とはいえ本格的にミタラシオをこのデッキに入れてもいいかもしれないな。

「さあ、俺のターンだ」3体のマナロックの効果でマナはアンタップしないからなあ！」わかってるって、ドレミ24、クルト、ミタラシオ

をアンタップしてドロー」

俺はこのターン、マナを置かなければ使用することの出来るマナの数は0だ。メガ・マナロック・ドラゴン……………殿堂入りしているカードだけあって恐ろしい能力である。

「フヒヒwwwwwwまだ諦めてないようだが……………いいことを教えてやるよお」

「いいことねえ……………?このターン、おっさんは負けない(キリツ、とかか?)」

「察しはいいようだなあ、ガキい!僕の残りのシールドは全てS・トリガー!それも3枚共《爆殺!!^{ばくさつ} 覇悪怒楽苦^{ハートドラック}》なのだよお!」

「そ、そんな……………というかイカサマしたんですか!!!」

「人聞きが悪いなあ、彩たん!普通のデュエマで勝負するとはこの僕、外道 盛人は一言も言っていないからねえ!」

……………こんな奴がデュエマをやっていると思うと腹が立つな。

「それだけじゃないだろ?手札には『ニンジャ・ストライク』能力を持つクリーチャー……………《光牙忍^{こうがにん}ハヤブサマル》がいる」

「フヒツ、ご名答……………本当に腹が立つクソガキだなあ……………」

「ニンジャ・ストライク?ハヤブサマル?」

「あ……………簡単に言うとおっさんにはシールドとは別に、身を守る手段があるってことだな」

「そ、それじゃあ、このターンに勝つことなんて……………っ」

「……………まあ、多分大丈夫、なはず」

「は?」

「えっ!」

俺の勝利宣言に困惑するおっさんと、女の子。本当におっさんはいいことを教えてくれるな。おかげで——確信を持って勝てる、はず。

「フヒヒヒヒヒ!!使えるマナもない、場にいるのはシールド・トリ

ガー1枚で全滅する雑魚3体のみ！そんな状況で勝利宣言だとお
……ふ、ふぎけるのもいい加減にしろよ！クソガキ！」

ああもう、クソガキクソガキって……………

「ふぎけてるのはおっさんだろ!!!自分が勝つためにはどんな手段を問
わない……………そんなお前にデュエマをやる資格なんて、ない!!!」

「!?」

「それと俺はクソガキじゃねえ！高宮^{たかみや} 翔^{しょう}だ！覚えておけ!!!」

「ぐ、ぐぬぬぬ……………」

「いくぞー！ドレミ24でシールドを攻撃するときには革命チェンジ！」

「ま、また革命チェンジ！シドかあ？ドレミかあ？い、いずれにしろ無

——「俺が出すのは……………コイツだ!!!」!?」

「現れろ！全ての時を司る法皇つ!! 《時の法皇^{ときほうおう} ミラダンテXII^{トゥエルブ}》
!!!」

ドレミからタッチを受け、現れたのは黄色いたてがみ、空を駆ける
大きな白き翼……………背後には時を示す12のピット。

音と自由を愛する『ドレミ団』の盟主——時の法皇 ミラダ
ンテXII、君臨。

「き、綺麗……………!」

「ふ、ふん！何が出てこようがハヤブサマルで「ミラダンテXIIの『ファイナル革命』、発動!!!次の相手のターンの終わりまで、相手はコスト7以下のクリーチャーを召喚できない！」フヒツ!?ハ、ハヤブサマルが!？」

ミラダンテの美しき音色がツタのように外道の腕から手札に巻きつき、ハヤブサマルを縛り付ける。

「更にミラダンテの能力で手札からコスト5以下の光の呪文を1枚、無料で唱えることが出来る！俺が唱えるのは呪文、《ミラクルストップ》！」

先程とは違うミラダンテの音色は別のツタを生み出し外道を拘束する。

「ぐ、ぐうううう!!!何をしたあああああ!!!?」

「そのままシールドを『T・ブレイク』だ!？」^{トリプル}

音色を奏で終わるとミラダンテは上空へと駆け上がり、ピットから大量の光の矢を生成、そのまま外道のシールドへと射出した。

それは外道の全てのシールドを粉々に打ち抜き、破壊した。

「フヒーバ、バカめ！ハヤブサマルが出せなくても僕には3枚のハードラックがツ……………!!!?」

破壊されたシールドから全て稲妻型のアイコンが現れるが、外道を拘束しているツタが全てのアイコンを覆いつくしそのまま爆発。3枚のハードラックは発動することなく外道の手札に舞い戻った。

「ミラクルストップの効果で、次の俺のターンの初めまで、相手は呪文を唱えることはできない。」

「……………ひっ、たたたた助けてくれ!!!今まで悪かった！なんでもするから許してくれえええ!!!」

勝利、そして

「す、すごい……………本当に勝っちゃった……………!!」

「あ、ああありえない!この僕がっ!こんなガキに負けるなんてえ!!!」

「どうやら負けることなど夢にも思っていないなかったらしい。未だに現実を受け入れていないようだ。」

「さて、俺が勝った時の約束。忘れてないよな?おっさん」

「……………さっ、3本勝負だ!!!」

「そんな現実を受け入れていない外道のおっさんはとんでもないことを言い出した。」

「はっ。」

「う、ウオーミングアップってやつさ!さっきのは偶然だ!そうに決まっている!」

「ウオーミングアップ、でイカサマとか大人のウオーミングアップってのは結構、派手にやるんだな」

「う、うるさい!大体お前だってイカサマしただろう!ミラダントとかぼ、僕が知らないカードを使うのは卑怯だぞ!」

(うわあ……………言動が幼稚過ぎ……………)

ふと横を見ると彩たん、と呼ばれていた女の子も顔が引きつっている。多分俺と同じようなことを思っているのだろう。

「な、なんだその目は!次こそお前を滅茶苦茶にして!おやおや、随分と楽しそうなことをしているね?」フヒツ!」

もう一度デュエマをしようと準備しかけたおっさんの肩に俺や女の子ではない手がかかる。

振り返ったおっさんは手をかけた人物を見た途端、顔色が青ざめていく。

「しゃ、しゃしゃしゃ社長?!?!?!」

「やあ、社長だよ」

!?!?!?!?!

おっさんに手をかけた人物は黒いスーツを着た背の高い男性だっ

た。『社長』、と呼ばれた人物はそのまま話を続ける。

「いや、外道君と丸山ちゃんが来るのが遅いから心配して探しに来ただけ……何を、していたんだい？」

『社長』から放たれる凄まじい圧に心臓を鷲掴みにされたかのような恐怖を感じる。外道のおっさんはあまりの恐怖に口をパクパクさせることしか出来ない様子。

ぎゅつ。

(ん……………?)

右肩に少し違和感を感じ横目で見ると女の子が俺の右肩に震えながら抱き着いていた。若干涙目になっているようにも見える。

(おいおい……………『社長』さん、やりすぎだつて)

「答えられないか……………残念だ。君には期待していたのだが……………私の見込外れだったようだね」

「ち、ちち違いますう!!!わ、わたしはあ、あいつから丸山さんをま、守ろうとしたんですう!!!」

『社長』に切り捨てられたくないとなんとか矛先を俺へと逸らそうとするおっさん。

「ほう……………そう、なのか？」

「は、はいいい!!!あの暴漢から逃げる丸山さんを私がデュエマで成敗してやろうとー!」

「だ、そうだ、『暴漢』君……………それは、本当なのかな？」

ぐぐぐ。

こちら側に放たれる圧が強くなり、右肩にかかる力が更に強くなるのを感じる。

あかん。右肩持つてかれる。とつとつこの『茶番』を終わらせなければ――!

「ここに、『真実』がある」

左手でスマホを操作し、デュエマをする前に俺が用意していた『真実』を解き放った。

『そうだなあ…まずは彩さんにレクチャーしてあげなきゃなあ…』

『彩さんのシールドをブレイクしてダイレクトアタック…フヒヒヒヒヒヒ』

『フヒ、フヒヒヒツヒヒヒツツツ』

!!!!!!

『きやあつ!?!』

『ちよ、調子にこきやがって……デュエマで勝負だ小僧!ぼ、僕が勝ったらこ、ここで見たことは忘れて帰ることだなあ!!!』

『はあ……構わないが、その代わり俺が勝ったら今後一切、丸山の前に姿を現すなよ?』

『フヒ、フヒヒツ!いいだろう!』

ブツツ。

「あ……ああ…」

「これが『真実』だ。ごめんなくおっさん。最初から『詰み』なんだわ」
「…この件は私が責任をもって上層部に話させてもらう。君の処遇は決まり次第こちらから連絡しよう」

「……………」

どうやら白目を剥いたまま気絶したようだ。突き付けられた現実を許容できなかったようだ……無理もない。

「ふうく……外道君の処遇は帰ったら即会議で決めるとして……って丸山ちゃん!?!」

「は、はひっ!」

フツ、と圧が消え『社長』が女の子——丸山さんの様子に気づく。

「丸山ちゃん!大丈夫だったかい!?!なにかこの男にされなかったかい!?!」

「はひっ！だ、大丈夫です！大丈夫ですから！」

急にずいといと迫られて軽いパニック状態になっているみたいだ。

「ど、どどどどうしよう翔！丸山ちゃんが、丸山ちゃんが！」

「『父さん』、演技に力を入れすぎ」

『社長』——俺は『父親』である高宮たかみや渡わたるに軽くチョップを入れながら二人を落ち着かせようと奮闘するのであった…………

「この度はウチの社員が迷惑をかけて本当に申し訳ない」

「い、いえいえそんな…………」

二人を落ち着かせた後、俺たちは父さんが乗ってきた車に乗って目的地に向かっていた。

「翔、今日はありがとう。途中からだったが外道君を圧倒する見事なデュエマ、見させてもらったよ」

父さん、俺のデュエマ見てたのか…………

「私からも助けてくれてありがとう、高宮君！」

「礼なんてそんな…俺はただデュエマをしただけなんで」

「デュエマはよくわからなかったけど…とてもキラキラしてた！」

「ぎ、キラキラ？」

よくわからないが悪い気はしないな。

キキッ。

俺たちが話していると車が止まる。どうやら目的地に着いた模様だ。

「さて、みんな行こうか。パスパレのみんなも心配しているはずだからね」

「は、はい！（千聖ちゃん達に心配かけちゃったなあ…うう）」

「あれ？俺も？」

「何を言ってるんだ、翔？元々私が呼び出していたじゃないか」

「……………あー、そうだった（丸山さんのことで完全に頭から抜けてた…）」

こうして俺たちは目的地——父さんが社長を務めるアイドル事務所の扉を開けるのであった。

「「彩ちゃん（アヤさん）！」」

「わわっ……………!?!」

俺たちが事務所に着くと3人の女の子が集まってきた。

水色の髪をしたどこか不思議な雰囲気醸し出している女の子。薄黄色の髪を長く伸ばし、少し大人びた雰囲気を感じさせる女の子。童話から飛び出したかのような風貌の白い髪の女の子。

3人共丸山さんを心配していたようでそのまま4人で話し始めた。

（……………なんか俺、場違いじゃないか？）

父さんの呼び出しで来たものの、なんで呼ばれたのかわからないくらい場違い感を感じる……………!?

「盛り上がっているところ申し訳ないが大和ちゃんはどうしたんだい？」

「マヤさんなら落ち着かないので機材の調整をしている、と言ってきましたー」

父さんの質問に白い髪の女の子が答える。

「ありがとう、若宮ちゃん。そうしたら誰か大和ちゃんを呼んできて

くれないかな？パスパレの活動について私からみんなに伝えることがあるんだ」

「わかりました。麻弥ちゃんは私が呼んできますので」

「あつ、千聖ちゃん！麻弥ちゃんを呼ぶなら私が行くよ！」

「大丈夫よ、彩ちゃん。それに突然彩ちゃんが行ったらきつと麻弥ちゃんが驚いてしまうわ」

「ううっ、確かに……………」

「大和ちゃんのごことは白鷺ちゃんに任せるとして私たちは会議室に向かおうか」

白鷺ちゃんと呼ばれた女の子は大和ちゃん、という方を呼びに行く。俺たちは父さんの後を歩きながら会議室に向かい始めた。

「ねーねー、あなたは誰？もしかしてパスパレの新メンバー？」

歩いていると水色の髪の子が興味津々の様子で俺に話をしてきた。

「パスパレ？っていうのはよくわからないけど……………少なくとも新メンバーではないと思うぞ」

「えーっ、パスパレ知らないの!?!」

「知らないな……………さつき大和さん？を呼びに行った人は白鷺千聖さんっていうのはわかるけど」

白鷺千聖。普段あまりテレビを見ない自分でも名前位なら知っている。幼い頃から天才子役として名を馳せた有名人だ。

「ふーん、へえ〜……………」

俺の発言に更に興味を持ったのか、女の子はじーっとこちらを見つめてくる。

「……………るんっ、ってきた！」

「!?!」

女の子は嬉しそうにそう言うのと丸山さんともう一人の女の子が驚いた顔をする。

「る、るん?」

「名前はなんていうの？高校生？どこの高校に通ってるの？」

「うえっ!?!ええつと……………」

女の子は目を輝かせながら次々と質問をぶつけてくる。

「ヒナさん、なんだかとても嬉しそうです!」

「日菜ちゃんがここまで他の人に興味を持つなんて……………」

(み、見てないで助けてくれ……………!)

結局、会議室に着くまで女の子の質問は続くのであった……………

P a s t e l * P a l e t t e s

〈会議室〉

「……「ガールズバンドデュエマフェス?」……」

大和さんを連れてきた白鷺さんと合流し一段落したところで父さんが本題と称し大きな紙を広げた。

俺を含めた6人が父さんの広げた紙——ポスターのようだ

——をまじまじと見つめる。そこには、

「ハゲしくアツかりしデュエ魂、バンド魂求む!ガールズバンドデュエマフェス開催!」

と大きな文字ででかでかと殴り書きされていた。

「今、デュエルマスターズ……デュエマが流行の兆しにあるのは知ってるかい?」

「えっ!?!」

丸山さんが驚く。俺も驚いたが他の人の反応を見るに当たり前なことなのだろう。

「あ、彩ちゃん……」

「さ、最近忙しくて……あはは……」

白鷺さんが知らなかった丸山さんの様子を見て呆れている。俺も少しは世間の情勢を知っておくべきだな……うん

「このイベントはそんなデュエマ流行にあやかっただけでもらった人にガールズバンドを知ってもらおうというイベントなんだけど……このイベント、Pastel*Palettesに出てほしいという誘いを頂いちゃってね」

「ほ、本当ですか!?!」

「ガールズバンドデュエマフェス……いいね!るんっ、ってきた!」「ま、待ってください!ジブン、デュエマはやったことはないっすよ!?!そんな状態で大丈夫なんですか!?!」

「…麻弥ちゃんの言う通りだわ。デュエルマスターズをやったことがない私達に来てくださった方が満足して頂けるようなデュエマをすることは難しいと思います」

「私もマヤさんやチサトさんの意見に賛成です！千里の道も一歩から！です！」

(その意味はちよつと違うような…)

最後の発言に心の中でツツコミを入れながらも状況を確認する。賛成派が2人に反対派が3人。特に白鷺さんはとても慎重気味にこのフェスに対して出ることとを反対している。過去に似たようなことがあったのだろうか？

「その点に関しては勿論、無計画ではないさ。開催は1ヶ月後と時間は多くとらせてもらった。それまでにみんなにはデユエマを覚えてもらう。その為のインストラクターも準備したのだけれども…」

父さんが困った顔をする。インストラクターってまさか……………

「もしかして……………外道さんが!?!」

「その通り、彼が本来ならばそうなる予定だったんだが……………」

思いついて暴走、この話は白紙、と

「「うーん……………」」

無理ではないか——そんな雰囲気がこの会議室に溢れ出す。そんな中、

「んー、だったらしよーくんに教えてもらおうよ！」

水色の髪の女の子——氷川さんがとんでもないことを言い出した。

「え、ええっ!?!」

「だって、その外道さん？だっけ？その人より強いならしよーくんに教えてもらおうよ！」

この場にいる全員の視線がこちらに向くのを感じる。

「……………元々、翔には外道君の手伝いをしてもらうようお願いをしようと決めていたんだ。彼だけに任せていると大変なことになる——そんな気がしたからね。まさか、こんなに早く起こるとは思ってもいなかったけどね」

なるほど、父さんが俺を呼び出したのはそういう理由だったのか

「……………俺は」

考える。いつもの俺なら面倒くさいと突っぱねるところだろう。突っぱねて、とつとと家に帰り動画の続きを観よう。そう思っただろう。しかし――

「……………」

丸山さんと目が合う。Pastel*Palettes……………俺は彼女たちのことは全くと言っていいほど知らない。けれども何故だか彼女たちのことをもつと知りたい、そして彼女たちのデュエマを見てみたい……………そう思った。

「俺なんかでよければ、喜んで引き受けたい。もちろん、外道…さんの代わりが来るまでも構わない。」

「もちろん、私達も総力を挙げて次のインストラクターを探すつもりだよ。だからガールズバンドデュエマフェス……………お願いできるかな?」

「私は賛成です!デュエマはやったことないですけど……………何事にもチャレンジしてみたいです!」

最初に声をあげたのは白い髪の女の子だった。

「ジブンも賛成です!前と違って時間はたっぷりあるみたいですし、イヴさんの言う通りジブンもデュエマにチャレンジしてみたいです!」

大和さんからも賛成の声上がる。あとは白鷺さんだけだ。

「イヴちゃん、麻弥ちゃん…そうね、チャレンジしてみることも大切よね…わかりました。私も賛成です」

白鷺さんも賛成。これで5人の了承は取れた。

「みんな、ありがとう。翔も突然のことで本当に申し訳ない」

「大丈夫だって、引き受けたからにはフェスの成功を目指して頑張るから」

「すまないね。早速だが私は色々準備に取り掛かせてもらおうよ、外道君の処遇のこともあるしね。それじゃあ、みんな本番に向けて頑張ってくれ!」

「「「はい！」「」」」

俺たちに激励の言葉を贈ると父さんは会議室を後にした。ここから先は俺に一任ということね……………」

「えーつと…とりあえず自己紹介から始めようか。外道…さんの代わりが来るまでの間、皆さんにデュエマを教えることになった高宮翔です。短い間になるとは思いますがフェスの成功を目指して精一杯頑張っていくのでよろしくお願いします！」

「「「よろしくお願いします！」」」」

俺が自己紹介を済ませると丸山さん達の自己紹介が始まった。

「さっきも紹介したけど…Pastel*Palettesのボーカル担当、丸山 彩です！改めてよろしくね、高宮君！」

丸山さんはアイドル研究生からPastel*Palettesのボーカルに選ばれたとのこと。研究生上りということとはとてつもない努力を積み重ねてきたに違いない。この努力を踏みにじろうとした外道のおっさんを止めることが出来て本当によかった…。

「じゃー次はあたし！ギター担当の氷川 日菜だよー、よろしくねーしよーくん！」

水色の髪の子——氷川さんはオーディションに応募したところ、見事に採用されてPastel*Palettesに入ったとか。ギターはお姉さんへの憧れから始めすぐに弾けるようになる辺り真性の天才と言ったところか。俺も教えていたらいつの間にか追い抜かれてそうだな…

「次は私でいいかしら？Pastel*Palettesベース担当の白鷺 千聖です♪よろしくお願いしますね、高宮さん♪」

白鷺さん……………間近でみると同年代とは思えない大人びた雰囲気を感じる。彼女がどのようなデュエマをするのか見るのが非常に楽しみだ。

「次は私ですね！私の名前は若宮 イヴです！キーボードをやっていますーデュエマもブシドーで精一杯頑張ります！よろしくお願いします、シヨウさん！」

「ぶ、ブシドー……………？」

白い髪の女の子、若宮さんはハーフの帰国子女でモデルとしても活躍しているようだ。日本の文化に興味がありその中でもブシドーは特に気に入っているようだ。デュエマにもサムライやニンジャはいるということを伝えるととても目を輝かせて喜んでいた。

「最後はジブンですね！ドラマ担当の大和 麻弥です。よろしくお願います。」

茶髪の眼鏡女子、大和さんは元々は代理としてP a s t e l * P a l e t t e sに参加していたところ、白鷺さんに目を付けられ正式に加入することになったらしい。白鷺さん曰く眼鏡を外したときの素顔が良かったとか。

「皆さん自己紹介ありがとうございます。早速デュエマ、んですけど明日から練習時間の合間とかで教えていくことになると思う。その辺りの時間調整はこの後トレーナーさん達と俺で調整…かな」

「えーっ！今すぐやろうよ！」

「俺としても今すぐやりたいところではあるんだけど……ルールを座学で教えるよりも実際にデュエマに触れてもらって覚えてもらったほうがいいかなと思って。その為のデッキを今持ってないんだ」

恐らく父さんとしても明日から本格的に始めるつもりだったのだろう。父さんに呼び出された時にも特に持ち物の指定もなかったし。その為、さつき外道のおっさんとのデュエマで使用したデッキ――

【白青サザン・ルネッサンス】デッキしか持っていない。

「あ、あのー……ちよつといいですか？」

「ん？大和さん？」

「さきほど、皆さんが自己紹介している最中に社長さんがこんなものを置いて行ったんですけど……翔さん、これが何か分かりますか？」

そう言つて大和さんが机の上に置いたのは――

「……………カッププラーメン？」

カッププラーメンでよく使われているような容器だった。

「カッププラーメンね…」

「社長の差し入れかな？それにしても不自然だけど…」

「あく…それ、デュエマのデッキだ」
「」「え?」「」

俺が蓋を開けると中にはデッキが入っていた。

「ほ、本当だ…カードが入ってる」

「あははっ、すごい!」

「カップラーメンの中にカード…隠れ身の術ですね!」

カップラーメンの容器にデッキが入ってたことに驚く5人。俺も最初見た時、カードをカップラーメンの容器に入れる発想なんてどうやったら思いつくんだったって驚いたなあ……………

ん?カップラーメン……………?

「あゝっ」

「ど、どうしたの?」

俺は慌てて持ってきたものを確認する。確か、昼飯用にカップラーメンを持ってきてたはずだ……………

「…あー、やっぱりか」

「高宮さん、それって…」

「昼飯用に持ってきたカップラーメン…のつもりだったがどうやら間違えたみたいだ」

みんなの前にカップラーメンだと思っ……………たものを取り出す。

「もしかしてそれもデッキっすか…?」

「父さんが持ってきたのとは内容は違うけど同じカードですね」

やはり慌てて準備をすると良くないな。デッキは揃ったからデュエマは出来るのは嬉しい誤算だけでも。

「ねえねえしよーくん!カードは揃ったからデュエマやろうよ!」

「そうだな…丸山さん、氷川さんの相手をお願いできるかな?」

「わ、私!」

「俺のデュエマを一度見てるから大体の流れは分かるかなと。もちろん分からないところは俺が教えるんで。皆さん、どうでしょう?」

「私はそれで大丈夫よ。彩ちゃん、お願いできるかしら？」

「ジブンも問題ないっす！お二人のデュエマを見て勉強させてもらいますね！」

「お二人とも、頑張ってください！」

「み、みんな…うん！日菜ちゃん、私が相手になるよ！」

「彩ちゃんかあ…しよーくんとやってみたけど…るると勝つちやうよ？」

丸山さんと氷川さんの激しくアツかりしデュエマが今、始まろうと
していた……………!!!

(とりあえず、昼飯どうしようかな……………)

革命時間停止 V S 革命疾風速攻（前編）

「二人とも、準備はいいかな？」

「手札が5枚、シールドを5枚だっけ？……よし、オツケーだよ、しよーくん！」

「私も、準備OKだよ！」

丸山さんと氷川さんが向かい合い開始前の準備を終える。

「それじゃあ、改めて説明するけどデュエル・マスターズ：デュエマは並べてある相手のシールドを全て破壊した後に相手に攻撃を決めると勝利となるゲームだ。ゲームの流れはこれから説明するからとりあえず、ゲームを始めようか。掛け声は『デュエマ、スタート』だ」「よし、負けないよ、彩ちゃん！」「こちらこそ、よろしくね、日菜ちゃん！」

「デュエマ・スタート!!」

俺と白鷺さん達が見守る中、丸山さんと氷川さんのデュエマが始まった。

「最初は私の番だね！えーっと……」

『ドロー・ステップ』：デッキの上からカードを1枚引いて手札に加える………なんだけど先攻の最初のターンはこのステップはない」

「ええっ!?そんなあ……」

「その代わり相手より先に動くことが出来るのでその利点をうまく活用するってところだな」

「うう…次がマナチャージだよな？高宮君、どれを置いたらいいかな？」

丸山さんが手札を見せてくる。今回丸山さんに渡したのは赤…火文明と緑…自然文明のカードを組み合わせたデッキだ。この手札なら………

「そうだな…このカードがいいかな。このカードの出番はまだ先なのと、レインボウ多色カードは自分が動く時に役立つってくれるから」

「うん、わかったよ！じゃあ、この《メガ・キリキリ・ドラゴン》をマナチャージ！」

「次に『メイン・ステップ』。メインステップはクリーチャーの召喚とを行うステップなんだけど、今丸山さんのマナは横になっているキリキリドラゴンだけ。使えるマナは0マナだからそのまま『ターン・エンド』」

「次のターンから、だね…ターンエンド！」

「これがデュエマの基本的な流れになる。ここまででわからないこととかはあるかな？」

「質問、いいかしら？もし、デッキのカードがなくなって引けなくなってしまう場合はどうなるの？」

「おお、いきなり『山札切れ』についてか……」

「引けなくなったら、というよりデッキのカードがなくなった瞬間そのプレイヤーの敗北。たとえどめの攻撃をしている途中でもデッキがなくなった時点でそのプレイヤーの負けになる。」

「無くなった瞬間敗北って…結構厳しめなのね……」

「デッキがなくなるのってそう頻繁に起きるものなんですか？」

「相手の山札切れを目標とした戦略やデッキのカードを引くことを主に眼に置いたデッキだとそう珍しいことではないかと」

「イクサの兵糧攻め、ですね！本で読んだことがあります！」

「今回の丸山さんと氷川さんのデュエマは山札切れによる決着は恐らくないと思うがそういった戦略もあるということは覚えておくといいかもしれない」

「まあ、山札切れ…『ライブリアウト』で勝つのは始めたばかりのみんなにはあまりおすすめはしたくない。安全に勝つという一点としてはとても魅力的ではあるが。」

「ねー、あたしの番進めてもいいかなー？」

「あー、ごめん！氷川さんの番だったな」

「それじゃあ、あたしの番いっくよー！ドロー！」

氷川さんが勢いよくカードを引く。

「えーつと…この子がるんっ♪としないかな？《タイム2^ッ ファソラ》を置いてターン終了だよ！」

「……………完璧、というかもしかして氷川さんってデュエマやったことある…？」

「やったことないよー？でも彩ちゃんの番を見てたらなんとなくこんな感じかなーって」

流石、天才はどんなモノにも適応出来るもんなのな…

「それじゃあ次は丸山さんのターンだ。まずは横になつているマナを起こす『アンタップ・ステップ』から。このステップで前のターンに使ったマナやクリーチャーを起こす…『アンタップ』することが出来るんだ」

「えーつと、マナをアンタップしてドロー。でいいのかな、高宮君」

「そう、その調子その調子！」

丸山さんも飲み込みが早い。この調子なら次のターンにはテイーチングはいらないかもしれないな。

「手札の《イフリート・ハンド》をマナチャージ。これで2マナ使えるから…このクリーチャーが呼び出せる？」

「カードの左上に書かれているのがそのクリーチャーを召喚したり呪文を唱える為に必要な『マナコスト』。そのクリーチャーは2マナ…マナゾーンのカードを2枚横にする…『タップ』することで召喚できるね」

「すみません、質問いいですか？」

「大和さん、質問どうぞ」

「ありがとうございます！マナコストを払えるならどんなクリーチャーでも召喚出来たりするんですか？」

「おつと…説明不足だった。召喚や呪文を唱える条件として召喚や唱える呪文と同じ色のマナを含めたマナコストを払う必要があるんだ。自然文明のマナだけで出せるのは自然文明のクリーチャーや呪文だけ、といった感じだね。多色カードに関してはその含まれている文明分の色マナが必要だよ」

「ということとは…例えば彩さんのマナゾーンに置かれている《メガ・キリキリ・ドラゴン》は火と自然文明のカードだから、火と自然のマナを含めて5枚のマナを使えば召喚できるってことですね！」

「その通り！ちなみに1つのマナが持つ文明は最高1色って決められていて、マナゾーンの多色カードはタップする際に生み出すマナの色を決める必要がある。今、丸山さんのマナにあるキリキリドラゴンは火か自然のマナを生み出せるけど使うときにはどっちかの色を選ぶ必要があるんだ」

「なるほど…勉強になります！」

「それじゃあ、続けるね！2マナタップして《スタート・ダッシュ一撃奪取 トップギア》をバトルゾーンに出すよ！」

丸山さんのバトルゾーンにクリーチャーが召喚される。いい立ち上がりだ。

「……………？」

丸山さんが首をかしげる。あれ、どこかで間違えたか——？

「高宮君の時みたいクリーチャーが出てこない……………？」

「……………あー、そういうことね」

俺が外道のおっさんとやったデュエマが初めて見たデュエマだったようだし勘違いしても仕方ない。

「俺がやった時は【RDS】を使ってたんだ。今回は特に何も使っていないからクリーチャーが出てきたりとかはしない」

「【RDS……………？】」

聞き慣れない単語に首をかしげる4人。唯一大和さんのみ知っていたのか、顔をパツと輝かせる。

「聞いたことがあります！Real Duel System……………リアルデュエマシステムはいつでもどこでもダイナミックなデュエマを提供する革命的な技術！と雑誌に載ってましたよ！」

「へえ〜！なんだかすっごく面白そう！それ、今からやろうよ！」

「ま、まあまあ！とりあえずこれが終わってからRDSのことは説明するから今はこのデュエマに集中、集中！」

興味津々な氷川さんを落ち着かせ、デュエマを再開させる。

「クリーチャーは召喚したターンは攻撃できないんだよね？」

「そうだね。例外はあるけど基本的には攻撃は出来ないよ」

「それじゃあ、これでターン終了！」

「あたしのターン！アンタップしてドローだよ！《音階の精霊龍 コルティオール》をマナチャージして2マナで《一撃奪取^{スタート・ダッシュ} アクロアイト》を召喚してターンエンド！」

氷川さんも丸山さんと同様にクリーチャーを召喚してターンを終える。

「私のターン、マナをアンタップしてドロー！」

ドローした後には丸山さんは手札を見て、何かを考え始めた。

「……………うん、こつちかな。《無頼勇騎^{ぶらいゆうぎ} ウインドアックス》をマナチャージ、そしてトップギアの効果で最初に出す火のクリーチャーの召喚コストを1減らして2マナで《ピアラ・ハート》をバトルゾーンに！」

丸山さんが二手目に選んだ手は、目の前の脅威の排除。

「ピアラハートがバトルゾーンに出た時、パワーが1000以下のクリーチャーを1体、破壊する！日菜ちゃんのアクロアイトを破壊するよ！」

「っ……………へえ〜」

氷川さんのアクロアイトが墓地に送られる。アクロアイトもトップギアと同じように光のクリーチャーの召喚コストを減らす効果がある。氷川さんのテンポを遅らせながら自分の展開をスムーズに行う。非常にいい動きだ。

「トップギアでそのまま日菜ちゃんのシールドを攻撃するよ！」

「しよーくん、攻撃されたシールドはどうすればいいの？」

「シールドに攻撃するときはまず、攻撃側がブレイクしたいシールドを選ぶ。今回は1枚ブレイクだから丸山さん、好きなシールドを1枚

選んで」

「それじゃあ、一番左のシールドで！」

「氷川さんはそのシールドを手札に加える。S・トリガー…稲妻みたいなアイコンがカードに書かれていたらそのままただで使うことができるけど…」

氷川さんが一番左のシールドを確認する。

「…ちえー、トリガーじゃないね」

「よーし、ターン終了だよ！」

「これでアヤさんが一歩リードですね！」

「でも、シールドがブレイクされたことで日菜ちゃんの手札が増えた…逆転も不可能じゃないわ」

「とりあえず、一通りのルールや動きは教えたからここからはテイーチングなしでやってみようか！」

「よーし、このまま押し切っちゃうよー！」

「いやいやあ、ここから日菜ちゃんがるんっ♪と逆転しちゃうよー！」

さあ、まだこのデュエマは始まったばかりだ。

革命時間停止 V S 革命疾風速攻（後編）

「あたしのターン！アンタップ＆ドロー！」

日菜ちゃんのターンが始まる。アクロアイトがいなくなったからこのターンは大きいアクションは取れないはずだ。

《交錯の翼 アキュラ》をチャージして3マナ！《ガガ・ピカリヤン》を出すよ！」

ガガ・ピカリヤン：パワー2000かあ…

「出た時の効果でカードを1枚引いてターン終了！」

大きなアクションはなかったものの、手札を減らすことなくクリーチャーを出してきた。この調子だと先に息切れするのは私だ。

「（その前になるべく日菜ちゃんのシールドを減らさなきゃ！）私のターン！アンタップしてドロー！」

このターン使えるマナはチャージをすれば4。でも、どのカードもマナには置きたくないカードだ。それなら…

「このターンはマナにカードは置かないよ！そのままトップギアの効果で2マナで《風の1号 ハムカツマン》をバトルゾーンに！」

ハムカツマン。可愛いイラストとは裏腹にとっても優秀な能力を秘めている。

「ハムカツマンの効果でデッキの1番上のカードをマナゾーンに置くよ」

マナに置かれたのは《爆竜 バトラッシュ・ナツクル》。6マナのクリチャーだ。とても強力なカードだけど6マナに届いていない次のターンにこれを引いていたとしてもすぐにマナゾーンに置いちやっっていただろう。

「さらに！ハムカツマンは『スピードアタッカー』を持っているから出たターンにすぐ攻撃が出来るよ！」

次のターンへの繋ぎと速攻性。シールドを減らしたい今の状況にうってつけのカードと言える。

「ハムカツマンでシールドをブレイク！するときには……！」

そして……………高宮君が使ったアレを私も！

「《漢の2号 ボスカツ》に革命チェンジ！」

攻撃中のハムカツマンを手札に戻し代わりにボスカツをバトルゾーンに送り出す！

「革命チェンジ!?なにそれ!?!?」

「ふふーん…クリーチャー同士の絆の連携!それが革命チェンジだよ!」

決まったあ…!日菜ちゃんも驚いているみたいだ。

「絆の連携…!アヤさん、かっこいいです!」

「…ああ、なるほどね、彩ちゃんらしいわ」

高宮君が恥ずかしそうにしているのを見て千聖ちゃんはなんとなく察してみた。うう、生暖かい視線が痛い…

「えー、革命チェンジは特定の文明・種族等を持ったクリーチャーが攻撃する時に攻撃しているクリーチャーと手札にある革命チェンジを持つクリーチャーを入れ替えることができる。コストの大きなクリーチャーをただで出すことが出来る非常に強力な能力だ」

「ボスカツはパワー5000!更にバトル中パワーが2000上がる能力を持っているよ!」

このパワーなら日菜ちゃんのターンにボスカツがやられちゃうこととはないだろう。

「うーん、シールドブレイクだねえ…彩ちゃん、どのシールドをブレイクする?」

「じゃあ、また一番左で!」

一番左のシールドを日菜ちゃんが確認する。その瞬間、

「るんっ♪つとききたあ!S・トリガー!《青寂の精霊龍 カーネル》だよっ!」

「ええっ!?ここでS・トリガー!?!」

「えーっと、このクリーチャーがバトルゾーンに出た時、相手のクリー

チャーを1体選ぶ。次の自分のターンののはじめまで、そのクリーチャーは攻撃もブロックもできない。だから、ピアラハートを選んでこのターンは攻撃できないようにするよ」

うう、ピアラハートが攻撃できなくなっちゃった……………

「じゃ、じゃあ、トツプギアでシールドを「いいのかなー？彩ちゃん？」…えっ？」

トツプギアで攻撃しようとした私を日菜ちゃんが止める。

「カーネルは『ブロッカー』能力を持っている。ブロッカーを持っているクリーチャーをタップすることでクリーチャーの攻撃先をそのクリーチャーに変更させることが出来るんだ」

「つまり、彩さんのトツプギアの攻撃先は日菜さんのカーネルに変更される…」

「パワーはトツプギアが1000でカーネルが3500：ヒナさんのカーネルの方がパワーが高いです！」

「クリーチャー同士の戦闘は基本的にパワーの高い方が勝ち、場に残り低い方が墓地に送られる。このままだと丸山さんの攻撃は返り討ちになるな」

「そういうこと！どうする、彩ちゃん？」

うう、完全に止まっちゃった……………日菜ちゃんの手札は残り3枚。もう1枚はブレイクしてきたかったなあ…

「ターンエンドだよ…」

「革命チェンジはびっくりした……………けど！ここから反撃開始だよ！」

今のドロローで日菜ちゃんの手札は7枚。でもマナはチャージしても4枚。ボスカツを倒せるクリーチャーは出せない…はず。

「《反撃のサイレント・スパーク》をマナチャージ、2マナでもういつかいアクロアイトを出すよ」

カーネル、ピカリヤンにアクロアイトが加わる。でも、ボスカツに勝てるクリーチャーはいない！

「しよーくん、確かタップされているクリーチャーには攻撃をするこ

とが出来るんだよね?」

「ああ、そうだけど………」

「それじゃあ、カーネルでボスカツを攻撃!」

「ふえっ!」

ボスカツの方がパワーが高いのに攻撃!? どういうこと!?

「すくるとくきくに! このデツキの切り札! 《大聖堂^{だいせいどう} ベルファアレ》にるるん♪と革命チェンジだよ!」

「ひ、日菜ちゃんも革命チェンジ!」

「あつ、彩ちゃんびつくりした? だけど、驚くのはこれからだよ! ベルファアレがバトルゾーンに出た時、相手のクリーチャーを2体まで選び、タップ! トップギアとピアラハートを選択するよ!」

日菜ちゃんの切り札、ベルファアレによって私の場のクリーチャーが全てタップされてしまう。

「この効果で選んだクリーチャーは次の彩ちゃんのターンにはアンタップされないよ!」

「アンタップしないってことは………」

「次のターン、彩ちゃんが攻撃できるクリーチャーは手札のハムカツマンだけ。しかも、ピアラハートとトップギアはタップしたままでまだ日菜ちゃんのターンが回ってくるから次の日菜ちゃんの攻撃で破壊されてしまうでしょうね………」

もしかして私、だいぶピンチなのでは……!?

「そのままベルファアレでボスカツに攻撃! ボスカツのパワーは効果で7000になるけど………」

「ベルファアレのパワーは8500……ボスカツの負けだね………」

「うーん、このままピカリャンで彩ちゃんのシールドをブレイクするのもいいけど……トップギアを攻撃かな! あつ、ピカリャンも革命チェンジで《タイム2 ファソラ》と入れ替わるよ!」

ピカリヤンと入れ替わったファソラのパワーは5000。トップギアを蹴散らすには充分すぎるパワーだ。

「効果を使い終わったピカリヤンを革命チェンジさせて手札に戻すことでピカリヤンがもう一度効果を使えるようになった…日菜さん、完璧に革命チェンジを使いこなしてますね…」

「ヒナさん、すごいです！」

「ふふくん、あたしはこれでターン終了だよ？」

頼みのボスカツを失い、場には動けないピアラハートのみ。1枚のシールドトリガーからあつという間に日菜ちゃんに形勢逆転されてしまった…！

「わ、私のターンっ、ピアラハート以外をアンタップしてドロ…」

と、とりあえず何か逆転できるカードを引かないと……

「っ…う、嘘でしょ…？」

私が引いたカードは《爆竜 バトラツシユ・ナツクル》。このターンに使えるマナはチャージをして5。トップギアが残っていれば効果でコストを軽減して出すことが出来たけど…

(日菜ちゃんはこれを読んで………?)

「彩ちゃん、もしかして…6マナのクリーチャー、引いちやった？」

「えっ、なっ……そ、そんなことない、よ？」

「丸山さん、思いつきり顔に出てる」

「…うん、日菜ちゃんの言う通りだよ。今引いたバトラツシユ・ナツクルをマナチャージ」

このターンに出せないのであればもう出す機会なんてないだろう。

日菜ちゃんの盤面をひっくり返すにはこの手札じゃ不可能だ。

「(だったらブロッカーがいなくなった今のうちにシールドを攻めなきゃ!) 火と自然のマナを含んだ3マナで、さつき手札に戻したハムカツマンをもう一度召喚、効果でデッキの一番上をマナチャージ！」

置かれたマナは…《ネクスト・チャージャー》。これなら…！

「これで残ったマナは3！その残った3マナで《ゴーゴー・ジゴツチ》も召喚だよ！」

「彩さんが全ての手札を使い切った！」

「いや、ジコツチにはデッキの上からカードを5枚見てドラゴンを1体手札に加える効果がある！」

「なるほど…彩ちゃんがさっきのターンにマナをチャージしなかったのはこの為だったのね」

これでなんとか次のターンに繋がるカードを見つけなきゃ…！

「ジコツチの効果でデッキの上からカードを5枚確認するよ！」

《無頼勇騎》 ウインドアックス 《ドラゴンじゃない。

《ゴーゴー・ジゴツチ》…これもドラゴンじゃない。

《漢の2号》 ボスカツ 《ドラゴンだけど恐らく前のターンの二の舞になるだろうなあ…

《ネクスト・チャージャー》…呪文だ。

《メガ・キリキリ・ドラゴン》…うん、アレのことを考えるとこの子が一番かな？

「《メガ・キリキリ・ドラゴン》を手札に加えて残りを山札の下に送るよ！そのままハムカツマンで日菜ちゃんが一番左のシールドをブレイク！」

「むむつ、トリガーはないねー」

「ジコツチは召喚酔いしてるからこれでターン終了だよ」

これでシールドは残り2枚…次のターンに引いたカード次第、かな

「あたしのターンだね！アンタップしてドロー！手札に戻したピカリヤンをマナチャージ、アクロアイトの効果で1コスト軽減して5マナで《指令の精霊龍》 コマンデュオ》をバトルゾーンに！」

コマンデュオ…パワー6000のW・ブレイカー。効果は…えっ

「コマンデュオの効果でカードを1枚引いた後に手札から5マナ以下の進化？ではない光のクリーチャーを1体バトルゾーンに出すことが出来る！この効果で手札から4マナの光のクリーチャー、《青音の精霊龍》 リンガール》をバトルゾーンに出すよ」

コストを支払わずただでクリーチャーが増えた!?

「リンガールの効果で自分の手札を1枚裏向きにして、新しいシールド

ドにするよ〜」

「ああっ！せつかくブレイクしたシールドが……………」

「それじゃあ、攻撃行くよー！ファソラでピアラハート、アクロアイトでハムカツマンに攻撃！」

ピアラハートとハムカツマンが墓地に送られ日菜ちゃんの場合からアクロアイトがいなくなる。

「ベルファアールで彩ちゃんのシールドをW・ブレイク！両端のシールドを選ぶよー！」

ここでなんとかトリガーを…きたっ！

「シールド・トリガー！《ハート・メラツチ》！バトルゾーンに出た時の効果でコスト3以下のクリーチャー…ファソラを破壊するよー！」

ブロッカーのリングガールを何とかしたかったけどシールド・トリガーが出ただけでも良かった…これならまだいける！

「コマンデュオとリングガールは攻撃できないからこれでターン終了だねー」

「私のターン…！」

リングガールを何とか出来てこのターンで勝利する為のカード…アレを引くしかない…！

「お願い、ドローっっっ！」

「…！」

私は祈るように力強くドローする。引いたカードは……………っ！

「やった！まずはマナチャージしないで火と自然のマナを含んだ5マナで、《メガ・キリキリ・ドラゴン》を召喚！効果は使わないでそのままシールドをブレイク！」

「その攻撃は通さないよ、彩ちゃん！リングガールで「まだまだよ日菜ちゃん！攻撃時に革命チェンジ！」！！」

「切り札いくよ！キリキリドラゴンを《DXブリキング》に革命チェン

ジっ!!」

私はドロイーで引いたカード……………《DXブリキング》とキリキリド
ラゴンを入れ替える。

「ブリキングは7マナ9000のW・ブレイカー!更にバトルゾーン
に出た時、コスト6以下のクリーチャーを1体、破壊する効果がある
よ!この効果で日菜ちゃんのリングールを破壊!」

「うっそお!」

「日菜さんのブロッカーがいなくなった!」

「そのままブリキングで前のターンに増えたシールド以外をブレイク
だよ!」

ブレイクした2枚にトリガーは…

「トリガー…ないなあ」

「丸山さんの場に攻撃出来るクリーチャーはジコッチとメラッチの2
体。シールドはこの攻撃で残り1枚…」

「つまり、アヤさんのクリーチャー全員で攻撃すれば…」

「何もないなら、彩ちゃんの勝ちね」

「ジコッチで最後のシールドをブレイク!」

…これで何もなければ……………!

「まあ、《青寂せいじやくの精霊龍せいれいりゆう カーネル》なんだけどね。 出た時の効果で
メラッチを止めるよ」

……………あつ。

「ベルファアレで手札に戻したカーネル……………?」

「そーだけど…もしかして忘れてたり?」

「彩ちゃん(アヤさん)…」

「ま、まあまあ。次から気を付ければ大丈夫大丈夫…」

う、うう~~~~~は、恥ずかしい~~~~~!

「た、ターン終了…」

「大丈夫だってわかってたけど……るんつときちやったよ！やっぱり彩ちゃんは面白い！」

「確かにそのデツキだとあのターンで勝ちに行くならブリキングしかないかった。それを引き当てる丸山さんは凄いよ」

「……あのあと、日菜ちゃんのターンの総攻撃で私はトリガーを1枚も捲ることが出来ずに負けてしまった。」

「お二人共、お疲れ様でした！見ててとても手に汗握るデュエマでしたよ！」

「ありがとう、麻弥ちゃん……」

あの場面は落ち着いて日菜ちゃんの盤面を崩すべきだった。コマンドデュオだけなら少なくとも次のターンで負けてしまうことはなかったはずだ。

「二人とも良いデュエマだった。初めてやったとは思えないくらいだ。1カ月もあればきつとフェスも成功間違いなしなデュエマが出るようになってると思う」

「しよーくんそれ本当!?!」

「うん、氷川さんなら俺よりも強くなるんじゃないかなあ……」

「えー、そんなことないと思うけど？あつ、そういえば『進化』って――」

「イヴさん、彩さん達が終わったので次はジブんとデュエマしませんか！」

「はい！マヤさん、お願いします！押忍！」

高宮君の説明を日菜ちゃんが聞き、イヴちゃんと麻弥ちゃんが準備を始める。

「いつまで浮かない顔してるの、彩ちゃん」

「あつ、千聖ちゃん……」

どうやら顔に出てしまっていたようだ。

「私、まだまだだなあ……って思っちゃって」

「最初から上手にできる人なんて日菜ちゃん位よ？麻弥ちゃんも言っただけど手に汗握るデュエマだったと私も思うわ」

「千聖ちゃん……！……！ありがとう！フェス、成功できるように頑張ろうね！」

そうだ、失敗したら本番までに練習すればいい。それはバンドもデュエマも同じだ。

「よし、頑張るぞー！」

気持ちを改めて引き締めるとイヴちゃんと麻弥ちゃんの観戦に意識を向ける。

この日はこの後千聖ちゃんと高宮君が一戦行い解散になった。

まだまだ私たちのデュエマは始まったばかりである……

そのデツキは…

……パスパレとの初めての出会いから2週間が過ぎた。

この2週間はとにかく忙しすぎて一瞬で過ぎていった。バンドの練習との調整、メンバーのスケジュールの調整、教える内容について等々。

トレーナーさんやマネージャーさん達と話し、調整して時間を作りパスパレのみんなにデュエマを教える。初めは高校生、なおかつ社長の息子ということもあり冷ややかな目で見られていたようだが回数を重ねる内にそんな目で見る者はいなくなっていた。

そして練習を積み重ねていく中で、メンバーそれぞれが自分に合うデツキを見つけていきフェスに向けてひたすら調整を続ける日々が続いていた。

「しかし……どうしたもんかねえ」

そんな中での問題が1つ。氷川さんのデツキがなかなか決まらな
いのだ。

デュエマでもその持ち前の天才性を発揮し、ぐんぐん上達していった彼女は他の誰よりも一番乗りで自分のデツキを組み上げた。…のだがその翌日には彼女は別のデツキを使っていた。聞いてみたところ最初はるんっ♪としていたが回しているうちに段々るんっとしなくなりそのまま解体してしまった…と。

そこで俺は色々なデツキを氷川さんに教えた。オーソドックスなデツキから玄人向けなデツキまで俺の知りうる限りのデツキを教え
たが、彼女はそれを完璧に使いこなすと翌日には別のデツキを教えて
ほしいとねだってきた。

気が付くと他のメンバー全員が自分に合うデツキを作り、氷川さん
だけが取り残される事態となつてしまっていたのだ。

「あと2週間…早く決めないと色々とまずいんだよな」

「色々とまずいって…何が?」

「うおっ!? って沙綾か…びっくりした」

悩んでいる俺に背後から声をかけてきたのは同じクラスの山吹

沙綾だった。

「どうしたんだ？店、今忙しい時間じゃ…」

「翔がずくつと考え込んでる間にお客さんのピーク終わっちゃってる」

「マジか!？」

そう、俺は今日の昼ご飯を買いに山吹ベーカリーに来ていたのだ。休日平日問わずそのおいしさから客足の絶えない店ではあるが…どうやら俺は深く考え込みすぎてたようだ。店に残っているのは自分1人だけになってしまっていた。

「ああつ、カレーパン…」

ピークが過ぎているということは店の商品も少なくなっているわけ…俺の大好きなカレーパンは跡形もなく姿を消してしまっていた。

「あはは…ちよつと待ってて」

そう言つて沙綾は店の奥に行くと言袋を持って戻ってきた。

「はい、カレーパン。焼きたてじゃないけど…どうぞ!」

「えっ!? いいのか?」

「もちろん! 翔にはいろいろお世話になってるし」

「色々つて…純にデュエマ教えてる位だぞ? なんだか申し訳ないな…」

沙綾には純という弟と沙南ちゃんという妹がいる。純には俺の時間が空いているときにデュエマを教えていたのだ。最近は忙しくて中々会うことが出来ていないが…

「いーのいーの! それに…」

「それに?」

「…ううん、なんでもない! それより今日もお手伝い?」

「ああ、デュエマフェスまで時間も残り少ないからな」

沙綾には俺が学校で考えているところを問い詰められ事情を話している。最初は驚かれたがあまり深くは聞かないでくれている。言いつらすような話でもないのですその気遣いが非常にありがたかった。「おつと、もうこんな時間か…カレーパンありがとう沙綾。純による

しくな」

「うん、お手伝い頑張つてね！」

沙綾の声援を受けながら山吹ベーカーリーを後にする。

「しかし、氷川さんのデツキをどうしよう…最悪俺のデツキを貸して
みるか…？」

これでダメだったら本当に打つ手が無い。その時は本人には申し
訳ないけどデツキを選んでもらうしかない…

そんな俺の悩みは――

「しよーくん！使うデツキ、決まったよ！」

「え？」

事務所に行くと、いつの間にか氷川さん自身が解決していたのだっ
た。

「ほ、本当か!?また1日で飽きたりとか…」

「大丈夫、大丈夫！今回は本当にるん♪ときたんだ〜」

氷川さんがここまで言うとは…本当に心配なさそうか。

「しよーくんが来る前に彩ちゃんやイヴちゃんやデュエマしたんだけ
ど連戦連勝！完全無欠って感じかな〜」

「ヒナさん、とても強かったです！1本も勝てませんでした！」

「完敗…強すぎるよ〜！」

丸山さんや若宮さんがまったく勝てないとは…本当に氷川さんと
相性のいいデツキなのだろう。

「マナ加速にドロー、除去に特殊勝利までなんでも出来る日菜さんら
しいデツキでしたよ〜！」

「【マスター・W・ブレイカー】…聞いたこともない能力だったわね…
高宮君は知っているかしら？」

………【マスター・W・ブレイカー】？というか…マスター!?

「白鷺さん、それは本当ですか!？」

「え、ええ…」

「氷川さんごめん、そのデツキ見させてもらってもいい？」

「うん、いいよどうぞ！」

俺は受け取ったデツキの中身を急いで確認する。………な、なんだ、これ………!?!

「………ありがとう、氷川さん。とりあえず今日の練習なんだけど…」
予定変更だ。俺は急いでメモに簡単な地図を書き丸山さんに渡す。

「高宮君？この地図は一体…」

「氷川さんはデツキの調整。ほかの皆さんは丸山さんに渡した地図の場所に行ってもらつて練習をお願いします」

「高宮君はどうするの？」

「俺は氷川さんのデツキ調整に付き合う。付いていきたいのは山々だけど…あと2週間だから、メンバー同士でデュエマする以外にも今渡した場所で経験を積んでもらおうかなと思って」

「うん、わかった！それじゃあ、みんな行こう！」

丸山さんは氷川さん以外のメンバーを連れて外に出る。………よし。

「それじゃあ、調整する前に氷川さんに聞くけど………そのデツキ、どこで手に入れたの？」

「昨日のバンドの練習の帰り道に拾ったんだ」

氷川さんが答える。拾った、か…ほぼ確定とみていいだろう。

「そっか…氷川さん、突然で申し訳ないんだけど…そのデツキがどういうものなのか…見させてもらおうぞ」

俺は1枚のカードを取り出す。それと同時に取り出したカードが強烈な光を放つ。

光が収まると俺と氷川さんは事務所の会議室ではなく何も無い殺風景な荒野にいた。

「このデュエマは絶対に受けては駄目だ！命に関わる！」

「命？」

「…そのカードが言う通りこのデュエマは真のデュエマ。負けた者は命を落とす」

私の疑問に答えるかのようにしよーくんが言った。

「ただ、俺が奪うのは氷川さんの命じゃない。そこにいる《ジョリー・ザ・ジョニー》、お前の命だ」

意味がよくわからない。ジョニーの命？

「デュエルマスターズには稀にカードに本物のクリーチャーが宿ることがある。ジョニーはその中でも特に特別なクリーチャーだと推測している」

「そうなの、ジョニー!?!」

「ああ、その少年の言うことに間違いはない」

まさか本当にクリーチャーが実在してるなんて…

「俺は今まで色々なクリーチャーを見てきた。それでも…【ジョーカーズ】なんていう聞いたことのない文明を従えるクリーチャーは初めてだ」

ジョーカーズ…彩ちゃんやパスパレのみんなも知らないって言うていたけどしよーくんすら知らない文明だったの!?!

「だからこそ、氷川さんとデュエマしてジョーカーズを俺が見極める。もし危険であれば俺がジョーカーズを…滅ぼさなきゃいけないから」

滅ぼす。それが当たり前のことのようにしよーくん…いや、目の前の少年はそう言い放った。

「…………今のしよーくん、るんってしない！そんなよくわかんない理由で滅ぼすのは間違ってるよー！」

「曰葉…」

「やろう、ジョニー！あたしたちのジョーカーズでいつものるんってしたしよーくんに戻そう！」

「…………ああー！」

そういうとジョニーは再びカードとなりあたしのデッキの中に戻っていく。

「ジョーカーズを滅ぼすなんて絶対にさせないよ！」

「行くぞ、ミラダンテ、……………」

小声で何か呟いていたようだがあたしの耳には届かない。

「真のデュエマ、スタート！」

こうしてデッキ調整のはずが、絶対に負けられないデュエマが始まってしまったのであった……………

特訓

「…彩ちゃん、本当にこのお店で合ってるの?」

「えーっ、と…」

私は高宮君から貰ったメモを改めて確認する。メモの場所はここで合っているはずなのだが……

「どうみても駄菓子屋さんですね…」

そう、たどり着いた場所は「きつね屋」という看板が掲げられ、駄菓子やフーセンガムといった色々な種類の駄菓子が並べられた店だった。

「デュエルマスターズを取り扱っているお店には見えないわね…」

「周りにもそれらしい店は見当たりませんし、翔さん…もしかして」

「そ、そんなこと!ない…と思う」

「騒がしいねえ…お客さんかい?」

店の外でみんなと話をしていると中からこの店の主であろうおばあさんが現れた。

「あっ!?えーっ…おばあさん!こんにちは!」イヴちゃん、この人を知ってるの!?

「はい!アルバイトに行く時にこの道を使うのでよく会ってます!」

「おやおや、イヴちゃんじゃないか!今日もアルバイトかい?」

「いえ、今日はこのお店に来ました!このお店でデュエマの特訓が出来ると聞いたので!」

「でゆ、でゆえま?電化製品か何かかい?」

どうやらおばあさんはデュエマのことを知らないみたいだ。

「おばあさん、私達は高宮翔さんからこの店を紹介していただきました。…この店ではデュエルマスターズを取り扱ってないのですか?」

今度は千聖ちゃんがおばあさんに質問をする。その際に千聖ちゃんがちらつと私の方を見てきた。

「(彩ちゃん、あのメモを)」

「あつ、うん!おばあさん、このメモに書かれた地図を見てここに来たらんですけど」

おばあさんに地図が書かれたメモを渡す。これなら――

「うーん…場所はここで間違いないけどゆえるますたーずや高宮つて人は知らないねえ…」

そ、そんな…なら、本当に間違えて…？

「そうですか…ありがとうございます」

「…もしかしてただけどあんた、白鷺千聖ちゃんかい？」

「え、ええ。そうですか…」

「やっぱり！はぐれ剣客人情伝、見てたわ〜」

「あ、ありがとうございます」

「普段はあんまり時代劇とか見ないんだけど人情伝だけは毎週欠かさず見てたわ、特にあの…」

これ、結構長くなりそうな予感…

「すみません、おばあさん！ちよつと他のお店をあたってみます！行こう、みんな！」

「そ、そうですね！行きましようイヴさん、千聖さん！」

「えつ、あつ彩ちゃん、麻弥ちゃん!？」

驚く千聖ちゃんの手を引きながら一旦私たちはきつね屋を後にするのだった…

「あつ、いらつしやいませっ！………つてパスパレの皆さん!？」

「こんにちは、つぐみちゃん!」

一旦、落ち着ける場所に行こうという麻弥ちゃんの提案で私たちは羽沢珈琲店にやってきていた。

「どうぞ、ごゆっくり」

つぐみちゃんに席を案内され、全員が落ち着いたところで私から話を始めた。

「さっきのことだけとおばあさん、一体どういふことなんだろう…?」

「うーん…先程はジブン、翔さんが店を間違えたと考えたんですけどやっぱり、そんなことはなさそうですね」

「マヤさん、それはどういうことでしょうか？」

「普段の翔さんなら、お店を間違えたのならこの中の誰かに連絡をしてくると思うんです。でもそれが無いとなると…」

「あの店で間違いない、ってことだね！」

「私も麻弥ちゃんと同じ意見だわ。あのおばあさんの様子をよく見ていたのだけど…メモを渡した時と高宮君の名前を出した時に少しだけ目が泳いでいたの」

「千聖ちゃん、本当!？」

千聖ちゃんが言うならほぼ間違いはないだろうけど…私も近くでおばあさんを見てたけどそんな細かい表情の変化、全く気が付かなかった…

「でも、もう一度行ってもさつきみたいにまたはぐらかされそうね…」

「イヴちゃん、あのおばあさんについてもっと詳しいことって知らない?」

「うーん…すみません、アヤさん。私もおばあさんのことはあまり詳しくは知らないんです」

「そっかあ…」

「どうしよう、完全に手詰まりだ。こんな時、高宮君がいれば…って！」

「そうだ!高宮君に連絡しておばあさんに事情を説明してもらおうよ！」

「あー、すみません彩さん。ジブンもさつきそれを思いついて電話をかけてみたんですけど、繋がらなかったんですよね」

「あう…」

「そうなるともう本当に…」

「あの、注文はお決まりですか？」

話が一区切りついた所でつぐみちゃんが注文を聞きに来た。

「ああつ、まだ何にするか決めてなかった!」

「あはは…そういえば今日は日菜先輩だけいませんけど別のお仕事な

「んですか？」

「ヒナさんは今日はデュエマの個人練習なんです！」

「えっ!? そう、だったんですか……」

「私達はこの近くの場所にデュエマの練習が出来る場所があるって聞いてきたんだけど……あつ、つぐみちゃんはこの場所知ってるかな？」

私は地図が書かれたメモをつぐみちゃんに渡す。

「えっ、……………っ！」

つぐみちゃんはそのメモを見ると、驚いたような顔をしたあと、

「……………知って、いますよ」

いつになく真剣な顔つきでそう言った。

「本当!? なら……」

「その前に……私とデュエマをしませんか？」

「……………えっ?」

突然のことで思考が停止する。つぐみちゃんが……デュエマ？

「この中の誰でも構いません、私とデュエマをして皆さんが勝ったらそのお店……………『きつね屋』のことについてお話します。でも、私が勝ったら……高宮君、いや、翔君のことについて教えて欲しいんです！」
「……………翔君、ね。私はやってもいいと思うけど……彩ちゃん、どうする?」

色々と話が追いついていけてないけど……………立ち止まっているよ
り、ここは誘いに乗るべきだ。

「うん、わかった。デュエマしよう、つぐみちゃん！」

「ありがとうございます！ デッキの準備、してきますね！」

そういうとつぐみちゃんは急いで店の奥に向かっていった。

「驚きました……まさか羽沢さんもデュエマをやっていたなんて。イヴさんはこのこと知っていましたか？」

「いえ、私もツグミさんがそういう話をしたところは一度も見たこと
なかったです」

「とりあえずつぐみちゃんのこととはひとまず置いておくとして、誰が
つぐみちゃんの相手をしようか？」

「日菜さんがいれば真っ先に名乗り出るんでしょうけど……………」

「ふふっ、確かに日菜ちゃんなら真っ先に名乗り出たでしょうね」

確かに日菜ちゃんがいればるんつとしてきたくみたいな感じですが、ぐに決まったに違いはない。だけど、この場に日菜ちゃんはいない。

私達は誰が勝負を受けるかを話し合って決めた後、つぐみちゃんが戻ってくるのを待つのであった……………